

留学体験記

3年2組30番 村上 姫奈

私が留学で学んだことと言えば数知れないが、今回はその中でも特に印象に残ったことや留学全体のことについて記していこうと思う。

私は中学三年生の十月頃突然留学に行ってみたいと思い、両親と計画を立て始めた。理由は、当時好きだったアメリカのアニメを字幕なしで見たいと思うようになったからである。なぜ高校選びの時期の後半で急に思いついたかは今になっては思い出せないが、私なりに高校が始まるタイミングで何かにチャレンジしたいと考えたのかもしれない。今まで海外留学に一切興味を示していなかった私が急に行ってみたいと言い出し、留学を推奨していた母は驚きながらも快諾してくれた。

しかし突然思いついたようなものなので留学に向けてまず何をしたらいいのかさっぱりわからなかった。そこで、インターネットの動画配信アプリで留学生向けの情報を配信しているチャンネルを見つけ、その人が推薦していた留学エージェントを訪ねることになった。母と私、そしてエージェントと話し合った結果、留学先はカナダ南西の島にあるビクトリアという街に決まった。留学と聞いて思い浮かぶ国はアメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリアなどであるが、国民性が温厚で比較的治安が良いとされるカナダを選んだ。加えてビクトリアのヨーロッパ風で美しい街並みに惹かれたことも一つの要因であった。

留学先が決定したところで次に何をするかというと、もちろん英語の勉強、かと思いきやいまいち気合が入らず、ろくに準備をしないまま高校が始まってしまった。しかし留学までこのままぼんやり過ごしているわけにもいかないので、出発の半年ほど前からはオンラインの英会話教室に参加し、英語の勉強に励んだ。その時の先生は自身も過去に留学、海外在住経験があり外国での生活にむけてとても参考になった。他には前述した留学生向けの動画を母とたくさん視聴し、カナダで人間関係や生活で困ったことがあった時などに備えた。

カナダでの生活が始まってみてまず感じたことは、家族や日本の友達に会えないことが思った以上に寂しいということであった。到着した日、ホストファミリーに挨拶をしたいと両親から電話がかかってきた。母や妹の顔を見た瞬間涙が溢れてきて自分でもとても驚いたし、学校が始まる前の一か月間のオリエンテーションの間は毎日不安で胸がいっぱいだったのをよく覚えている。落ち着いてきたころ、なんとなく携帯を開き、日本の友達の写真を見たら突然泣き出してしまったのも今となっては良い思い出である。

そしてもう一つの問題が、生活の全般のことを自分で行わなければならないということである。恥ずかしながら日本にいた頃は家の手伝いなどはあまり自分からする方ではなく、家事など全くと言っていいほどできなかった。朝食や学校に持参する昼食は毎朝自分で用意する必要があり、料理が得意ではない私には重い試練となった。洗濯に関しても、初めの頃は洗濯機の回し方が分からず毎回ホストマザーに聞いていた。他に印象的だった

のは、日本とは形式が異なるシャワーヘッドだ。部屋の片付けの途中で寝てしまいお風呂に入るのが深夜になってしまったせいでお湯の出し方を誰にも聞くことができず、日本の英会話の先生に電話でサポートしてもらいながら30分ほど格闘した後、やっとお湯が出てお風呂に入ることができた。このシャワーには、真冬にお湯が出なくなる等他にもトラブルがあり、いろいろと悩まされたものである。マイナス5度の中凍えながら浴びる冷水のシャワーは、一生忘れることはないであろう。少々苦い思いもしたが、パンケーキが焼けずホストファザーに苦笑された私にも日本に帰る頃にはある程度の生活力が身に付き、何より両親のありがたみに気づくことができた。

他にも留学を通して気がついたことがあった。これは私の成長に大きく関わることになるのだが、それは人生の中で、気分や運、やる気には波があり定期的に大きく浮き沈みするということである。この事実を発見したのは留学も半年が過ぎた頃、色々なことを体験しちょうど気分が高揚していた夜だった。まず、私の海外での人間関係は始まってからこれまでずっと完璧というわけでは無かった。学校が始まった頃、私はドイツ人、メキシコ人、トルコ人の8人グループに属していた。その頃はもちろんそのグループしか友達がいなかったため彼女らと長い間共に過ごしていたのだが、ここで留学中初めての壁にぶつかる。ある時私は、「もしかして私はみんなからそれほど求められていないのでしょうか。」とってしまったのである。なんだかみんなと話が合わないし、自分が話し始めてもあまり興味を示してくれないし、遊びに誘っても毎回乗ってくれるのは数人か、それでも当日に「やっぱり今日は行けない。」と断られてしまうのである。唯一グループの中でいつも私に明るく話しかけてくれていたメキシコ人のルーシーも、一緒にランチを取る回数が減っていた。私は彼女らと一緒にいることに拘る必要はない。そう思い、私は新しい友達を探し始めた。これは一つの壁であり、一つのターニングポイントとなる。

美術のクラスで同じテーブルだったカナダ人のクロエに話しかけ、一緒にランチを食べてもいいか尋ねてみた。彼女は日本のアニメやゲームが好きでしばしば私と話が盛り上がることもあったため、快く受け入れてくれた。当時の私にとって彼女は救世主だった。そして彼女に案内されたランチテーブルで、私は最終的に一番仲の良い友達となるタズミンと知り合うことになる。タズミンは母が日本人のハーフで日本語が堪能であった。もちろん第一言語は英語だが、母と母方の祖母の影響か彼女の性格は時々日本人らしく、一緒にいてとても落ち着いた。そしてタズミンの繋がりですべて他のカナダ人や、イタリアや韓国からの留学生の友達ができ私の留學生活はいい方向に向かっていくこととなった。この時私は壁を乗り越えた高揚感で毎日充実していた。

しかし浮かれていた私の前に第二の壁が立ち塞がる。前述したドイツ人たちのグループにうまく馴染めなかったのは私の言語力が不十分であり、それによる気分・やる気の低下が原因であることに気づいてしまったのである。友達がいるだけで満足しているままでは何も成長しているとは言えない。私はここに英語を学びにきているのだ。そうして沈んでいた気分を押し戻し、第二の壁を乗り越える日々が始まった。私が取った行動は、自分の現在の言語力を受け入れ、怖がらずに立ち向かうこと。つまり、言語力が足りなくても自分の表現力を振り絞りとにかく伝えるということである。そして同時期にバンクーバーへ留学していた友達にももらった、「思ったことをすぐに口に出すことで自分は話すことが好きだというイメージを持ってもらう」というアドバイスも取り入れるようにした。こうしてだんだんと友達との会話が楽しくなり、英語力の成長も感じるようになった。第二の壁を突破したのである。そしてまたしても充実した日々を手に入れた私は、今までのことを

振り返り、気分・やる気の浮き沈みの存在に気がつくこととなる。それから何度か落ち込むことがあったが、「今は最底辺だから、あとは踏ん張って上がっていただけだ」と自分のやる気に火をつけることが出来るようになったのである。同時に、自信を持って発言することは言語だけでなく全てに関する成長においてとても大切なプロセスであるということを知ることができた。

ここで、そんな涙あり、笑いありの留学の中で私が特に成長を感じることができたエピソードをいくつか抜粋してみよう。私のホストファミリーはカナダ人のホストマザー、ドミニカ人のホストファザー、ホストマザーの15歳年下の妹、そして当時4歳だったホストシスターで構成される。ホストマザーのメーガンは5人兄弟の長女であるらしく、とても寛容で包容力のある人物だった。私に対して本当の家族のように接し、その優しさには何度も救われた。ホストファザーは明るく陽気で、時々携帯に夢中で声が届かなくなるのが玉に瑕であるが話していて楽しい人だった。そして私のホストシスターであるカラーニは無邪気で可愛らしく、いつも私たちを笑顔にしてくれた。しかし彼女はさすが育ち盛りというだけあって、とにかく体力が有り余っていた。毎日私が部屋で学校の宿題をしていると、遊んでもらいに勝手に部屋に入ってきて大暴れするのである。ひどい日はポップコーンとジュースを手にとってきて、入ってくるなり部屋の電気を消し強制参加のパーティーを始めてしまう始末。ジュースもお菓子も毎回私の分まで持ってきてくれるから余計に追い返しづらい。そして何より私が悩まされていたのは来客時である。家にやってきた彼女の同世代の友達を5、6人連れて一斉に部屋に押し寄せる。これが子供好きならたまらないのであろうが、私はカラーニのことは愛しているけれど勉強中に押し寄せる大勢の子供を受け入れられるほど寛容ではないし体力もない。しかしこのまま勉強ができず1人の時間も確保できないというのは酷なので、ホストファミリーと「部屋に入るときはノックをする」という約束をしてこの問題を解決することができた。

そしてもう一つ印象に残っていることは、私が二学期に取っていたクラスでの出来事だ。そのクラスでは、レストランの厨房のような場所で本格的な料理を学ぶことができる。そしてそのクラスで作った料理はスクールカフェテリアで学食として販売されるのだ。厨房にはシェフが2人おり、1人はそのクラスをまとめている先生のような役割で、もう1人はその助手の役割を果たしている。問題なのがこの1人目で、彼は料理の腕は見惚れるほど高いのだがしばしばいい加減で横暴なところがあるのだ。私はある日、スキルチェックテストの確認を申し込んだ。スキルチェックテストとは、例えばスライサーを使う、包丁を正しく使う、業務用食洗機を起動させることができるなどのスキルをシェフがチェックし、成績に追加される評価システムの一つである。合格をもらおうと冷蔵庫の横に貼ってある表に印がつくのだが、私は五つほど合格していたのにも関わらず印がひとつもついていなかった。おかしいと思いシェフに報告すると、「忘れていたのでまた後でやる」と返ってきた。しかし次の日、また次の日と1週間経っても印はつかない。もう一度「どうしてまだ印がついていないのか」と今度は少し強めに聞いてみると、今度は「嘘をつけ、スキルチェックテストなんてやってないだろう」とあろうことか私を嘘つき呼ばわりしてきたのである。私は腹が立って、嘘などついていないと反論した後勢い良く厨房を出た。そして翌日、もちろん印はついていないのでシェフに「成績に関わるので正確に評価してほしい」と言うと、渋々表にチェックを入れてくれた。この時、私は自分自身の成長を感じた。日本にいた頃の私はおよそ190cmもあるシェフに口答えすることなどで

きたであろうか。この二つのエピソードで私がこれらの行動をとり解決することができたのは、今までの経験を通して「意見する」力をつけることができたという証なのである。この後もシェフとは何度か衝突することになるのだが、とても楽しいクラスだったので取って良かったと思っている。

そして10ヶ月の留学が終わり、日本に帰ってきて今一番感じることは大きく成長することができた清々しさである。留学に行く前、私はどちらかと言うと常に受動的であり自分の行動に自信が持てないことがあった。そして、友達がいないうちや周りが固まっている中での1人ぼっちの状況が苦手だった。留学を経験して帰ってきた後、堂々としていることが怖くなくなり、1人の状況でも苦手を感じなくなった。さらに自分が嫌だと思うことは嫌だとはっきりと言うことが大切だと学ぶことが出来た。素晴らしい経験をさせてくれた両親には言葉では表せないほど感謝している。そして、人生において大切なことをたくさん教えてくれたカナダが大好きになった。将来、この海外での貴重な経験を存分に活かして、海外の人々と関わりながら、言語をたくさん使うことができる仕事がしたいと思っている。そのためにも大学でさらに言語について学び、深めていきたい。

最後に、もし留学に行く前の自分に会えるとするならばこうアドバイスするだろう。「発言を恐れず自分を表現することを忘れてはいけない。もしも辛いことがあったらその時は踏ん張る時。あとは普段から母の手伝いをすること。それから、忘れ物には気をつけるように。」

4845/5760